

紹介 「世界の研究室から」

(臨床環境 6 : 45~48, 1997)

ウィーン滞在記

—オーストリア・ウィーン大学スポーツ科学研究所留学記—

上野純子

日本体育大学女子短期大学

一昨年の夏、ウィーンに5日間滞在した。

ドイツのポツダム大学で研究生生活を送っていた夫の元へ息子と訪ね、ベルリン、ポツダムで5日過ごした後、プラハに寄りウィーンに行ってみることにした。ウィーンには1986年の4月から1年間滞在したことがあったから、10年でどんなに変わったか見に行こうということになった。1年間だけの滞在ではあったがウィーンでの生活は私に活力を与えてくれ、その後の人生を変えるきっかけとなった。従って、私にとってウィーンは第二の故郷であり常に憧れの場所である。

ちょうど10年前の話になるが、ウィーン大学のスポーツ科学研究所で、オーストリアの健康教育の歴史を研究する機会を得た。

現在のオーストリアの「体育」の基礎を築いたのがガウルホーフとシュトラハイヒャーという人物であるが、この二人の出身がウィーン大学であった。

大学の図書館で、"Leibeserziehung" という雑誌を読み、オーストリアの体育の基礎となった「自然体育」に関心を持った。

シュトラハイヒャー女史の「自然体育」は、それまでのオーストリアの体育を全面的に批判したもので、個人の意思を尊重し、発育・発達を促進させることを目的として、のびのびと身体活動をさせる体育のあり方を追求したものであった。

このような体育を実施してきたオーストリアの子どもの健康は、日本の子どもとどんな違いがあるか調べてみたい、ということがきっかけだった。

10年前のウィーンはのどかで、人々も親切で、良い思い出のみが蘇ってくる。私の研究生生活に便

宜を図ってくれたスポーツ科学研究所のシュトロマイヤー教授は、体育史に関する研究ではヨーロッパでも第一人者だった。私の研究分野である健康教育の講座はなかったため、私は自由な形で研究活動をしたいという希望を持っていた。スポーツ科学研究所のプロコフ所長の許可でこの願いは可能になり、図書館の中の机を借りて半年は資料収集探索に集中した。



プロコフ所長の研究室で
プロコフ所長、シュトロマイヤー博士と

シュトロマイヤー先生は、住居を捜す時には車で不動産屋を回るのにつき合ってくれ、適切なアドバイスをしてくれた。

10件ほどの物件を見たが結局住みたいところが見つからず、10日ほどホテル住まいを余儀なくされた。ウィーンでのアパート探しは大変、とは聞いていたが、本当にこの期間は消耗した。

我々が成田から出発して数時間後に、チェルノブイリの原発事故が起っていたらしい。機上にいた我々には知る由もなかったが、数日後、テレビなどで放映されるにつれ日本では私の家族や友人

達が心配していたということだった。

我々が事故を知ったのは、しばらくして後のことだった。事故の事実を知らなかったため、ウィーンに着いて5日目の小雨の降る日、ほとんどの人が傘をさしている情景を変だなあと考えた。なぜかというと、ウィーンの人達は小雨程度なら傘をささないのが普通だったからである。

数日後から、ホテルでテレビをつけると、放射能の影響を懸念する番組が盛んに放映されるようになっていた。アパート捜しがなかなか順調に行かず少々くたびれてきたころ、前年夏知り合った知人にたまたま電話をしたところ知り合いの検事のアパートが空いているかもしれないという。彼の話では、ベートーベンが住んでいた家のすぐそばで環境は抜群とのこと。考える間もなく、即借りられるようお願いする。家賃は10万円とのことだった。

家主と翌日会うことができ、19区のGrinzing Strasseにあるアパートに住めることになった。アパートの前はすぐハイリゲンシュタット公園で、公園の中心にベートーベンの銅像が立っていたが、彼は不屈き者に目を赤く塗られていた。また、アパートから2分ほどの所にベートーベンが住んでいたという、今はホイリゲという酒場になっている建物がありいつも観光客で賑わっていた。アパートのすぐ隣は幼稚園で、午後は公園が遊び場となり子供たちの可愛い弾む声が毎日響いていた。5歳の息子を幼稚園にいれようと考えていたので、隣なら好都合と思い訪ねてみると、園内の掲示物はすべてフランス語。ドイツ語と英語以外は無理なのでやめる。

最終的には、ウィーンの日本人会事務所が紹介してくれたペーターパン幼稚園に通うことになった。息子は、朝幼稚園で別れる時3日間は泣いていた。

我々が住んでいた19区はウィーンの森に近く、バスで30分ほど上って行くと、ブドウ畑が一面に広がっていた。あたり一帯は、緑の森が広がり、土曜、日曜になると多くの家族づれが森をハイキングする。高い木々に囲まれ、豊かな自然がそのままの形で保存されている。日本では、休日とも

なればデパートにどっと押し寄せる風景を見なれていたが、日曜日は商店街はすべて休みだった。ウィーンの人々の休日の過ごし方は、家族でサイクリングかハイキングを楽しむという実に健康そのものに見えた。しかし、環境問題が大きく取り上げられたことで、ウィーンの森も酸性雨で破壊され始めており、森を守ろうというスローガンが新聞を賑わしていた。



グリンツィングの家並み

ウィーンでの生活の基盤ができ、いよいよ研究活動の開始である。我々家族の日課は朝8時に家を出て、公園を通り、ホーエバルテという高級住宅街にある電車乗り場から25分かけて幼稚園に着く。その足で夫と私はスポーツ科学研究所に向かう。4時半には息子を迎えるため研究所を後にする。

7月は夏期休暇に入ると、研究所のスタッフもバカンスに出かけ研究所は閑散とする。幼稚園は8月までやっていたので、幼稚園が休みになるまで研究を続けることができた。図書館のセクレタリーは、私がいつも文献を読んでいるので、「バカンスは行かないの？」と心配してくれる。「図書館が開いている間は毎日来るわ」というと、何て気の毒な人、という顔をして両手を広げていた。時には、交替勤務のセクレタリーがキッチンでハンガリアンシチュウを作りご馳走してくれ、ワインとチーズでお喋りに花を咲かせることもあった。そんな時には幼稚園に息子を迎えに行くのがつい遅くなり、ベソをかいた息子に謝ったりした。

幼稚園が休みに入った8月末、統一前の東ベル



図書館で
チーフ・セクレタリーのブフタさんと

リンに10日間滞在することになった。夫の同僚がフンボルト大学で研究していたので合流する。同僚の受け入れ先の教授が、車でポツダム、ドレスデンにも案内してくれた。ドレスデンの衛生学博物館では、4階建ての建物すべてに分類された人体模型が展示されていた。日本にはない博物館だったので興味を持って回ったものだった。東ベルリンではホテルに泊まるつもりだったが、休暇中のフンボルト大学の哲学の助手のアパートを安い宿泊費で使っていていいという。狭いアパートだったが清潔で、学者らしい部屋で遠慮なく使わせて頂いた。彼女はドレスデンの実家に帰っていたが、実家にも泊めて下さり翌日には雨の中ドレスデンを案内してくれた。

東ベルリン滞在中、東西を隔てていた壁や、そびえ立つブランデンブルク門を見てドイツの歴史を実感できた。まさかその時は、3年後に壁が壊されブランデルブルグ門が開通するとは知る由もなかった。東ベルリンからは複雑な思いと楽しい思い出をつめてウィーンに帰った。

ベルリンから帰ってからは忙しくなった。秋には文献探索と平行して、オーストリアの健康教育の実態を調査することになり、州の教育委員会を訪ねインタビューをした。また、ウィーン市が青少年をドラッグやたばこの害から守るために作成した小冊子や資料などを収集した。

子どもの健康実態に関する統計資料として、日

本では文部省刊行の「学校保健統計調査報告書」がある。オーストリアにはこの類のものとして「Statistisches Handbuch für den Bundesstaat Österreich」があるが、日本の統計書のように年齢ごとに体格や疾病・異常被患率を詳細に記述したものと違い、非常に大まかである。そのため、日本の子どもと年齢ごとに統計的に比較することはできなかった。また、学校における健康教育は、医者の仕事であり、日本の養護教諭にあたる学校看護婦も救急処置や看護が主体で、健康教育の観点はなく、健康面の知識はもっぱら家庭で得られるものというのであった。

10年後のアパートは当時と同じだった。

あたりの風景もまったく変わらず、10年前にタイムスリップしたような感じだった。

久しぶりに公園を散策し3人で昔話に花を咲かせた。息子は5歳の記憶はほとんど忘れていたが、この公園でリスにえさをあげたことは覚えているらしい。

アパートの前に立ち、懐かしくなって管理人室のベルを押してみたが留守の様で何の応答もなかった。

ウィーン大学のスポーツ科学研究所は、改築中で図書館も増築中だった。バカンスの期間のためか、お世話になった教授や大変親切にしてくれた図書館のチーフセクレタリーには会うことができなかった。所長のプロコフ博士はすでに退官した後だった。

オーストリアは、ドイツ、チェコ、スロバキア、ハンガリー、ユーゴ、イタリア、スイスの7国に囲まれている。当時は、東欧からの季節労働者も受け入れ、外国人に対しても寛大な国だった。現在は失業者が増え、ガストアルバイターと呼ばれていた他国からの出稼ぎ者を制限しているらしい。オーストリア人は誇り高く、汚い仕事はガストアルバイターの仕事だった。しかし、その誇りさえも失わざるを得ないほど失業者が増えているという。外国人に対しても警戒するようになっていたとのこと。残念な話である。

海外滞在といっても私の場合少し古い話になっ

て恐縮である。

10年前のあのゆったりとしたウィーンの様子は、あのアパートの周辺を除き確実に変わっていた。商店街も土曜、日曜に開くところが多くなった。当時地下鉄の大工事が行われていた中心街は地下鉄も完成し、すっかり近代的になっていた。趣のある古い建物が大分消えて、近代的な建物が増えたのはちょっぴり残念。人々の心は変わらないように願うばかりである。